

パルスフィールドゲル電気泳動法による *Salmonella Enteritidis*の疫学的解析

富田正章, 常重パトリシア, 松崎静枝
片山 淳, 岩崎 明, 宮村恵宣

日本食品微生物学会雑誌, 13, 117-120, 1996

1995年の9月10日から23日にかけて県内の異なる地域において*S. Enteritidis*を原因とする食中毒が発生した。汚染食品の関連性等究明のため、各事例からの分離菌株について薬剤感受性試験、プラスミドDNAの解析、パルスフィールドゲル電気泳動法による染色体DNAの制限酵素切断パターンの解析を行った。プラスミドDNA

の解析では識別できなかった菌株もPFGE法による制限酵素切断パターンでは各事例ごとの分離菌株を識別することができた。このことから、それぞれの分離菌株は遺伝学的に異なるものであることが明らかとなり、原因食品等の関連性はないと考えられた。

パルスフィールドゲル電気泳動法によるB群 レンサ球菌の型別について

富田正章, 松崎静枝, 片山 淳

第70回日本細菌学会総会 (1997年3月, 宇都宮市)

B群レンサ球菌の型別は、従来から耐熱性多糖体抗原による血清型別が行われているが、我が国では血清型JM9やNT6が流行の主要な血清型として報告されている。疫学的解析のためには、分離菌株のより詳しい型別が必要であることから、今回パルスフィールドゲル電気泳動法 (PFGE法) を用いてB群レンサ球菌の染色体DNAの制限酵素切断パターンによる型別について検討した。

菌株は1993年から1995年までの間に県内の一病院で分離された血清型JM9を86株、血清型NT6を26株、血清型Ⅲを10株、型別不能株を9株それぞれ供試した。各種制限酵素による切断パターンの特徴をみたところSma Iによる処理が優れていたことから、Sma Iによる切断パターンを主体として比較を行った。血清型JM9は20種

のパターンに分類できた。このうち53菌株は同一のパターンを示した。また、13種類のパターンはそれぞれ1菌株にのみみられた。血清型NT6は8種類のパターンに分類できた。このうち15株は同一のパターンを示し、残りの7種類のパターンは1~数株の菌株に分布していた。血清型Ⅲ及び血清型別不能株は、それぞれ7種類と8種類のパターンに分類できた。なお、いずれの血清型においても供試菌株の分離された時期における切断パターンの特徴は、認められなかった。また、母親と新生児のペアで分離された12事例のうち11事例は親子間で同一のパターンを示したが、1事例は異なるパターンを示した。これらのことから、B群レンサ球菌の同一血清型内の分類がPFGE法により可能であるとともに、血清型別が不可能な菌株の分類も可能となることが明らかとなった。